

---

# だぶる・すぷりんぐ。

カルテット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だぶる・すぷりんぐ。

### 【Zコード】

Z7347B

### 【作者名】

カルテット

### 【あらすじ】

春。それは終わりと始まり、もう一つの年の始まり。少年が見かけた同学年の少女は、ものすごい秘密をもっていた！？ある春の街の一角で起こった小さな物語。……多分。

(前書き)

作者の初短編です。結局、ジャンルはコメディーなんでしょうか、推理なんでしょうか……。

それはともかく、本編をどうぞ、ご賞味あれれ？（え

君がすべてを包む樹になるのなら、僕は全てを彩る花弁となろう。

／だぶる・すぱりんぐ。／

ある暖かい春の日の事。太陽が頭上で眩しく輝き、しっかりと色付いた桜の花弁が、散歩道を鮮やかに彩っている。風が吹く事に桜が静かに揺れ、花弁が宙を飛ぶように舞う。それは何とも言い表せないような美しさで、道を行く大勢の人の目に止まり、その顔を綻ばせた。

僕、深瀬裁ふかせ·たつもその人々の中の一人であり、決められた動作のように顔を綻ばせた。

春。それは始まりと終わり、もう一つの年の始まりの季節。

「……綺麗だなあ……」

僕は人混みから離れ、散歩道の中でも特に目立つ大きな木の下で立ち止まつた。

確かに、この木はこの散歩道がちゃんと舗装される前から立っていて、年齢は200歳を超える……だかなんだか。

そんな昔から、ここに訪れる人々を、上から静かに見守っているんだ。

そう思つと、何故かお参りしている気分になるのは僕だけですか？

「……もう帰るか……」

一通りお参りの動作をした後、僕はもう一度桜の樹を見上げる。

……途端、ふいに落ちてきた淡いピンク色の花弁に目を塞がれる。

「痛つ！？」

まつたく聞いてないぞ。なぜこうジャストタイミングで花弁が眼の上に落ちてくるー？

帰ろう

あたりに座っている人たちの冷たい視線をスルーして転がり回る様に痛がつたあと、眼頭をごしごしと擦りながら立ち上がる。

ああいこと無いな

自然と再び人混みアストラル（現在命名）に紛れ込みつつ、そう思いながらふらふらと彷徨うように歩く。人々の雑騒が、ゆっくりと僕の耳に入つてくる。

「ふう……やべつ、携帯のバッテリー充電し忘れてたつ」

なにひとこわか桜  
われにひれふせ

# 死せよ確殺！ 破滅龍劍！！

ああ!! あれは……ハルタン星じ

「ああああああ——。どうぐだせ。どうぐだせ。どうぐだせ。」

……色々とおかしい事に。けど最後の一文は聞き捨てならないな。

「…………」の声は？

：：確か、同学年の。

向こうからどこぞの外国人だよ的なきらきら金髪の少女が駆けてくる。つまりこの人混みの中を駆けてきているわけなのですが、何故か誰一人彼女に当たらない。彼女はものすごいスピードを出して  
いる。……今、緑色の残像が。

……どうかで見たことあるよ？

「あつ、貴方はあ！！」

僕がそんなことを考えていると、突如として少女が僕の目の前に現れた。ひどく頬が紅潮している。いつたい何があったのや。」

「……ええーと、とりえず「んにしほ、すまつ・はるの守毬春乃さん」

僕は困惑しながらも、暖かそうなマフラーをつけた少女もとい、守毬さんに挨拶をする。どんな緊急事態だろうが、笑顔を忘れず挨拶をする。これぞ、紳士のたしなみ。

そんな僕を見てか、息を切らしながらも彼女は挨拶を返す。

「ああっこんにしほ……ヒト……ふ、深瀬『何とか』さんっ…」「分らないなら言わないでいいよ！ なんとかってしかも『』で強調されても悲しいから！」

「え？……あ、あああ、すいませんね、ハイ。」

「……絶対反省してないよね、君。」

彼女はかなりの天然さんである。様子を見るに急いでるようだが、さすがだなあ。

と、彼女はふつと我に返つたよつて眼を見開き（といつてももともと大きいためさほど変わらないのだけど）、その場で足踏みを始めた。

「……え、もも上げ？ 陸上選手の基本動作なんとしてビツつしたの？」

「ち、違いますっ！ それよりも、ちょっと助けてください…」

「……別にいいけど、不良に追われてるとかは「めんだよ」

「ふりよおに追われてるんです！」

「ええっ！？ 言つた直後にそれですか！？ しかも何ふりよおつて！？」

なんか和む名前だと思うのは僕だけですか？ ふりよおつて。  
なんて言つている内に、彼女が走ってきた方向からいかにも悪そ  
うな男たちの声が聞こえて  
くる。

「オリヤア！ 嬢ちゃんどこにいつたんやヘエノー！」

「大人しく戻つてこいやヒュホー！」

「五右衛門風呂で沸騰させてやろうかポピー！」

ヤバイ、色々と危ない。最後の人もいつの時代の人ですか？

「あ、アレです！ あのまるいお鼻がチャーミングなネズミの着  
ぐるみを着た人たち……」

「それつて絶対ミ キーだよね！？ 確かにミ キーは瞬間移動が  
できるみたいに色々な場所に出没してるけど、そもそも三人じゃな  
いよね！？」

「早く逃げましょ！」

「えつ、スルー！？ しかも助けてとか言つときながら何で逃げる  
の！？」

「人権確保ですー！」

「意味わからないから！？」

さてさて走る守毬さんに連れられて、僕たちは人混みから出て小  
さな公園につきました。なぜ交番に行かないんだとかいう疑問はこ  
の際スルーしましょう。

守毬さんはよつほど全速力で走ったのか、肩で呼吸している。僕  
は日頃から走り慣れてるからあまり疲れなかつたが、なんせ人の中  
を走つていたので、あちこちぶつかりまくり。しかも前を走る守毬

さんの体から発せられる緑色の残像が酷く邪魔だった。

僕は黒いニット帽を頭から取り、ため息をつく。

守毬さんは背負っていたリュックをあらし、僕の目の前でファスナーを開け、中から拳銃を取り出し つて、何い！？

「な、何拳銃なんて取り出しちゃってんのー！？」

「別にいいじゃないですか」

「よくない！！ 激しく良くない！ しかも一般人の君がそんなもの持つてること自体 つて、はつ。」

周りのまばらな人たちから向けられる好奇の視線に気付き、あわてて声を潜める。

「 危ないって。そんなもん使つたら肩外れちゃうよ？」

「田頃から使つてますから大丈夫です」

「え、君どこかの秘密組織に所属しちゃつたりしてる！？ あり得ないよね！？」

「ええ、S P Kです」

「それってあれだよね、一昔前に流行った漫画のアレだよね！？」

なにかな、君つてアルファベットの最初から1-2番目を継ぐ者！？

有り得ないような会話を続けていると、向こうから先程のふりよお達が走つてくる。守毬さんを見つけたみたいだ。

すると咄嗟に、守毬さんが拳銃を彼らに向け つて止めて！？

「ストップ！ 駄目だつて守毬さんつ！ こんな素晴らしい真昼に銃撃音なんて似合わないよ！」

「サプレッサーつけてますから」

「そういう問題じやないよ！？ 齧しなんてよくない、ていうか周りの人、なんで警察呼ばないんだつ！？」

「どうやら……みなさんグルみたいですね」

「えつ、なんとまさかのグル宣言！？ もしかして僕たち完全に包囲されちゃってる！？」

「これがあるから大丈夫ですよ」

と、拳銃を持ち上げながら一言いい、続ける。

「どうやらふりょお達はライフルを所持してるみたいですねけど」

「ダメでしょそれ！？ だいたい今の日本はどうなっちゃってんだよ

！？ アメリカか！？ 自由の国USAか！？」

「だつてあのふりょお達FBIですから」

「そうこいつとは最初に言つてーっ！」

僕は額に滲んだ汗を拭きながら、守毬さんは拳銃で狙いを定めながら、それぞれじわじわと忍び寄つてくるふりょおもとい、FBI捜査官に目を向ける。

「どうすんの、コノ。守毬さんは拳銃を使い慣れてるらしくからいけど、僕はどうだ。長距離走ぐらいしか特技がないただの少年だぞ！？ 口喧嘩もダメ、普通の殴り合いなんて論外だ。まして拳銃なんて使つたら肩が外れるだけじゃ済まないかも。

「……深瀬さん、ちよつとお願いがあるんですけど、いいですか？」

と、守毬さんが僕にせや遠慮がちに言つて。

「説得を試みるなんて言わないだろ？」

「説得を試みてください」

「人の話ちゃんと聞いてる？」

「聞いてません」

「君と言つ人は……」

何故このようなことになつてしているのだ？ 説得を試みると、それでも、相手はFBI、ましてやヘンリーとか言つてゐる変質者（注意）だ。

何されるかわからない。

けれど、やってみる。

とりあえず、死なない可能性があるのなら。

僕はゆっくりと首を縦に上下させ、じちらかりFBIに近づいていく。もちろん、両手は90度に直角、うまいことホールドアップ状態。

「あのお……」

遠慮がちに話しかける。先程決意表明したからって、ここで怖がらないのはただの変人だ。

FBI捜査官の一人が眉をひそめ、一步後ろに下がる。なんですかって？ そりやあ、僕の背後で大きな銃口がしつかり狙いたがわず向かられているのだから。

「えつと……とりあえず、見逃してくれませんか？」

「W h a t - S ?

「え……英語！？」

「冗談さヒュホー！」

「……拳銃のことを見失してませんか？」

「……」

FBI捜査官の一人は、守護さんの拳銃を見つづ、再び一步下が

つた。ああ、心強い。

「……で、なんだ？ 少年。できればその少女をこうちらに渡してほしい。ヒュホー！」

「いえ、まだ渡すわけにはいけません。とりあえず理由を教えてください？ それがわかれば、もしかしたら貴方方にすべてを委ねることにしませんが」

「……成程、饒舌だな、少年。ヒュホー！」

『うう言つとい、『見た目は不良、中身はFBI捜査官、その名も、何とか…』は腕を組んでしばりへぶつぶつ咳いた後、くるつと後ろに振り返つた。どうやら、長官をお呼びのようだ。

「 今のうちだ、守毬さん」

「……はい？」

僕は誰も見ていないときに、少し下がつて守毬さんに小声で話しかける。当然、FBIの皆さんは誰も気がついていない。

「 今のうちだ逃げよ。うつすつやなんとかまるる」

「嫌です」

「何で！？ しかも即答つてひどくないか？」

彼女は目を瞑り、あつぱりと言い放つ。

「 いつたい、何を考えているのやら。助けてくださいって言つたから向とかして逃がしてやろつとしているのに。」

「 安直に考えると、これが彼女の最凶の能力 アルティメット・ナルチコラル（究極天然）か。……違つ気がするけど、まあいいや。」

「 けど、逃げたくないって申されても。……というか、早くなんで

君が追われてるのか知りたいんだけど

僕は言いつつ、ちらちらとFBIの皆様を確認する。いつにちりに向き直るか、分らないからね。

「 そんなに知りたいんですか？」

「 当然でしょ。変な理由だつたら君を助ける必要もないしね。」

「 変な理由とは失礼ですね。 大丈夫です、きっとふりょおさん方が語つてくれますよ」

守毬さんは握ったこぶしを緩めぬまま、はあと溜息を吐ぐ。溜息を吐きたいのは僕のほうだ。

「 お待たせしたヘイー。……君が彼女の立証人か？ヘイー」

突然というのもおかしいだらうけど、僕たちの目の前に大柄な男の人が現れた。服は……なんとまさかのバスタオル。日本は本当にどうなつちゃつてんだろう。

「 ……立証人？僕が守毬さんの？」

「冗談じやないなんて言つたら頭を拳銃で撃ち抜かれそうなのでやめとく。

……けど、立証人つて何のことだ？

「 そうだヘイー。その娘は我々の基地に侵入し、我らの極秘文書を盗んでいつた罪があるとされるヘイー。……まあうちのものが見ていたので確定なんだがなヘイー」

「 極秘文書つて……守毬さん、君の秘密組織はFBIを敵に回してゐるのか？」

「……まあ、そう言つ事になりますね、今は  
「……」

自分の知り合いがこんな危険な人だったとは、世の中も皮肉なものだなあと、自分に皮肉を込めた意味で、つい考えてしまう。……で、どうしよう。

今ここで僕が彼女の立証人としての立場を放棄すれば、僕は殺されるかどうかは分らないけど、守毬さんはまず確実に殺されるだろう。それこそ逃げなければ、の話だが。

だが、彼女の立証人としての立場を放棄しなければ、どうなる？ 裏の世界なんてわからない僕にとつてはどうなるか知る由もない。FBI、と彼女は言つていたが、本当かどうかもわからない。ん、そうすると守毬さんも彼らのグルで、僕をとらえようとしているかもしれない って、待て待て。元々僕はそんな大罪を犯した事はない。

やはり、ここは。

「そんなことよりも、逃がしてください」

論理的じゃなく、打算的に。

「駄目ヘエー。わが組織の威信にかけて、それは許されないヘイー」「だから何なんですか。組織の威信とかそんなのどうでもいいです。そもそもそちらの者が守毬さんを見たとか言つてますけど、嘘かも知れないじゃないですか。もしくは、見間違い。守毬さんを見たという人の証言があつても、それが正しいとも限らないし、防犯カメラのテープなんてここに持つてきているんですか？ ないんなら意味無いですよ。だからですね、今この場に」

そこで僕はいつたん言葉を切ると、最大限の気力をこめて、バス

タオル男を睨みつける。

「守毬さんが犯人なんて証拠は存在しません」

僕自身も何言つてんだかとか思つたけど、まあ、多分筋は通つて  
いると思つよ？ 言つとくけど、多分ね。

結果、バスタオル男は何も言えなくなつてゐる。怒り、というよ  
りかは呆れの色が強いと思う。何言つてんだこいつ、みたいな。そ  
う思つて当然だけね。

だけど、こつちも必死なんだ。……彼女が助かるというなら、仕  
方ないことであつて。

「……だから、見逃がしてください。否定権は使用できません」

そう言い放ち、僕は身を翻して彼女の手をつかみ、いたつて普通  
に歩きだした。

「なつ、ちょっと待てオイヘイーー！」

無視。その声以降、する音は僕たちが歩く音のみだつた。

「……ありがとうございました。深瀬さんのおかげで助かりました」

場所は、公園を出て、すぐ近くの道路。僕たちは歩きながら、会  
話を続けた。

「お礼されるようなことかな……一応。まあ、ぐだぐだ感否め

ない文章だつたけどね」「

「うん、僕は再び黒いニット帽をかぶる。守毬さんはそれを不思議そうに見てくる。

「……それにしても、よくあんな立場であんな言い訳が思いつきましたね」

「……言い訳とは失敬な。 事実なんでしょう?」

「……はい?」

突然、彼女は素つ頓狂な声を上げる。……まあ、仕方ないか。

「だつて、さつき君が持つてた拳銃 よく見れば、モデルガンだつた。それに、あのバスター男の発言もいまいち現実味がない。そのことから考えられることは、君が彼らとグルで、僕をからかう……いや、騙していたつてこと。何のためかは知らないけど何かの組織の勧誘とかだつたらお断りだよ?」

彼女は依然、ぽかんとした表情だ。それから少しづつ意識を取り戻していく最終的には嘲つたよつた笑いに変化した。

「……何を言つているんですか、深瀬さん? じゃあ私がSKのメンバーじゃないことを証明できるんですか?」

またそれか、と僕は溜息を吐く。風が吹き、僕のやや茶色がかつた地毛が歩く僕たちの後ろへなびく。 決して抜けていくのではない。

「それは、逆に言つと君が……本当にSKのメンバーである」とを証明できるのかい?」「

「えつ ？」

「……君があの時、拳銃を取り出した時。少なくとも、僕は君のリュックの中を全部見たと思う。……あの中には、君の取り出した拳銃以外何もなかつた。 身分証明書も、ね

「……」

守毬さんは僕より背が低いから、必然的に僕が彼女を見下ろす形になる。僕が見た時の彼女は、俯いたまま、無言だ。

「FBIに並ぶような組織なら、普通はFBI捜査官が所持するような、身分証明書を持つているはずでしょ。……僕はそんな組織から遠いからわからないけど、持つてないなんて上の人と言つたら、叱られちゃうんじやないか？」

僕は話す途中は道を走る車、黙つた時は道の先を見つめていることが多い。彼女は隣にいるから、視界には入つてこないけど、気配を感じる。

幼くて、裏の世界には何も関係していないような、暖かい気配。

失礼なようだけど、確かに感じる。

かといって、僕は人それぞれの漂わせる気配をかぎ取るなんてアビリティは持つてない。ただ、彼女が漂わせているオーラが強すぎるから。

……話がずれた。戻そつか。

「 まあ、君が身分証明書なんて必要ないような組織、もしくは今この場でポケットからコンパクトなソレを出して、突きつけられたら終わりなんだけどね」

「 参りました。」

「 ……はい？」

突如、彼女が顔を上げ、僕を見上げる。やはり、こう近くで見えてみると、とてもかわいい顔をしてると思つ。

それはさておき、何故か彼女は一人で話を進めていく。

「さすが、私が見込んだことはあります。なかなかの推理力です。」「……これは推理力というのかな？」

「ええ、多分。そうきつぱりした様子を見ると、あのバスタオルさんも誰だか予想は付いてますか？」

「え？ あ、ああ、あの人？ あの人さ、マイクも入念にして、カツラとかつけて、服まで非常識なものまで変身させたらしいけど、あの人 君の父さんだよね」

「ええ。観察力もとてありますね。まさか百眼の使い手ですか？」  
「僕は日向家かよ。そうじやなくて、匂いだよ。君の父さんはいつも香水をつけてるじゃないか？あの変装した時は香水はしてなかつたみたいだけど、さすがにもう体に染みついちゃつてるみたい。：：： 気を悪くしたら」めんね？」

隣の少女が神妙な顔をしていたので、あわてて付け足す。まあ、まだ一度しか守毬さんの父さんには会つていらないんだけどね。

「……成程。これならどうにかなりそうです」「……何の話かな？」

ふつふつと嫌な予感がしてくる。ああ、一刻も早く我が家ホームへ駆け戻りたい。

「ええ。深瀬さん、いきなり本題で悪いのですが」「

「……もう前置きは十分したと思つけど。もしかしてあれは僕を試すテスト？」

「はい。ですから、深瀬さん……」

彼女は先ほどとは大違い、やけに楽しそうな顔で、

「私と一緒に、部活を作りませんか?」

そう述べた。

「…………何で、そういうのやしないつか

世間的には、もう春だ。だが、僕の春は、まだ来ないようだ。

(後書き)

来ました。あとがきです。ここまで読んでいただきありがとうございました。

この物語は、ほぼ作者の面白満足作品であります。そのため、ぐだぐだ感否めなかつたり、中途半端なところで終つている所があります。申し訳ございません。

で、あるからにして、この小説は多分読切りです。多分です。連載化してしまう可能性があります。

そのため、この小説を読んで面白かつた、又はつまらなかつた、こことをどうにかしる等のコメントはぜひお願ひします。これからのお者の励みになるはずです。

では、この作品を読んでいただき、有難う御座いました。

……他の小説書かなくては（汗）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7347b/>

---

だぶる・すぱりんぐ。

2010年12月12日07時34分発行